

2020年ドバイ国際博覧会日本館基本計画検討会（第1回）

議事録

日時：平成29年11月28日（火曜日）16時00分～18時00分

場所：経済産業省本館17階国際会議室

議題

1. 検討会概要
2. サウード氏よりご説明（ドバイ国際博覧会の概要）
3. 吉川委員よりご説明（ドバイ概況）
4. 自由討議

議事内容

1. 検討会概要

東企画調整官

それでは、定刻になりましたので、まだお一人がお見えになっていませんが、5～6分で遅れてお見えになるとのことですので、ただいまより、「2020年ドバイ国際博覧会日本館基本計画検討会」を開会いたします。委員の皆様、関係省庁、関係機関の皆様におかれましては、ご多忙の中、お集まりいただき誠にありがとうございます。私は、商務・サービスグループ博覧会推進室の東でございます。よろしくお願いいたします。

はじめに、委員の皆様を御紹介致します。座長には、株式会社スペースインキュベータの、彦坂裕代表取締役役に御就任いただいております。委員には、日本科学未来館の内田まほろ様、本日はご都合がつかず、ご欠席と承っております。それから日本電気株式会社江村克己様、国文学研究資料館のロバートキャンベル様、先ほど申し上げた通り少し遅れてお見えになります。株式会社ライゾマティクスの齋藤精一様、本日はご都合がつかず欠席と伺っております。株式会社SD澤田裕二様、大阪府立大学橋爪紳也様、株式会社三菱総合研究所吉川恵章様、以上委員に御就任いただいております。また副幹事省として、総務省、文部科学省、農林水産省、国土交通省、さらに参加機関として独立行政法人日本貿易振興機構に御出席いただいております。

続きまして、当省の商務・サービス審議官を務めております藤木より御挨拶いたします。よろしくお願いいたします。

藤木商務・サービス審議官

藤木でございます。宜しく願いいたします。今日初回ですので、一言だけご挨拶申し上げ

げたいと思います。本日はこういうかたちで大変お忙しい皆様にお集まりいただきました。座長を引き受けて頂いた彦坂先生、それぞれの分野でご活躍いただいている皆様に一堂に会していただき、大変感謝しております。ドバイ博ということで登録博としては中東初めてですし、これは私が言うまでもなくドバイは交通の要衝であり、国際金融センターということで大変成長著しい都市です。多くの世界中の企業関係者、技術関係者、あるいはビジネスに限らず様々な関係者が行き交うまさに交通の要衝、一大拠点というところです。こういう中で日本がしっかりとメッセージを出していくということは日本の国際的なプレゼンスを向上させるという意味で大変重要な取り組みだと思っています。

それからご案内のように私どもドバイ 2020 年の次の 2025 年、大阪、関西で万博に立候補しています。大阪、関西の万博においては我々国連の SDGs というような世界のみなさんが直面しているグローバルイシューに対して様々な技術であったり、伝統文化も活用しながら課題解決を提案していきたいということをテーマに考えています。是非このドバイにおいてもそういった日本としての取り組み姿勢をしっかりと世界に示す中身にしたいと思っています。今回この検討会、これから 2020 年、3 年後ということですが、これから様々な出展内容を詰めていくわけですが、そのための基本的な考え方、方向性を議論していただく大変重要な場だと思っています。是非皆さまから忌憚のないご意見、それぞれの分野からしっかりとのご意見を賜って、私どもとして充実した議論の上に立った、ドバイ博出展を実現したいと思います。是非とも宜しく願いいたします。実は今日しっかりと議論を聞かせて頂こうと思っていたのですが、ちょうど国会をやっている、ご挨拶だけで失礼しなければならないのですが、是非これから短い期間になると思いますが、皆様方と充実した密度の濃い議論をしていきたいと思っていますので、どうぞ宜しくお願い致します。ありがとうございます。

東企画調整官

ありがとうございます。次に配布資料についてご説明します。配付資料についてはペーパーレス化の方針の観点から、お手元の iPad をご覧いただくかたちでご用意しています。画面に資料が表示されていますので順次タップしてご覧頂ければと思いますが、もしうまく開けないですとか何かトラブルがありましたら、挙手いただければ、事務局の者が伺いますのでおっしゃって下さい。

続きまして本日の会議の扱いについて早速ですが資料 3 に基づいてご説明致します。非常に基本的なところですが、検討会は原則として公開、配布資料も原則として公開させていただきます。議事録、議事要旨については原則として終了後速やかに作成し公開する。また個別の事情に応じて非公開にするかということについては座長に一任させて頂きたいと考えています。以上です。それでは以降の議事進行は彦坂座長にお願いします。宜しくお願い致します。

彦坂座長

ご案内ありました彦坂です。皆様宜しくお願い致します。今日ご来席の委員の皆様のご意見をなんとかブレないビジョンにまとめていきたいと考えています。委員会が3回ということですのでかなり集中的に短い期間でまとめあげなければならないので、その辺ご協力頂きたいのですが、序破急ということでもうまく落とし込めれば良いなと思っています。一方でドバイ万博のメインテーマ、皆様ご存知でしょうが、割と幅広いメインテーマですので、極論を言えば何をやっても良いというのに近いと思います。実は1970年の大阪万博の時に、人類の進歩と調和ということでこれも考えてみればあまり状況は変わっていないという気はします。

大阪について言いますと先ほど商サ審からご案内がありました。25年に立候補して、その通過点でもあるわけですので、今回の万博の出展というのはそういう意味もあるのかなという気がしています。皆様今日は初回でもあるので、思い切り吹かした思いを言っただけだとありがたいと思います。幅が広がると風呂敷も広がるのでいろいろ畳み方というか、縛り方も多く存在するので是非お願い致します。しかしあくまで万博出展が前提での討議ですので、私はよく言うのですが、難しいことを易しく、易しいことを深く、深いことを愉快にやるというような方針で進めていきたいと思っています。微力ですが皆様のご意見をなんとかまとめあげたいと思いますのでどうぞ宜しくお願い致します。

それでは早速議事等に入ります。最初に事務局から今回の2020年ドバイ国際博覧会日本館基本計画、現在のこの会議の進め方についてご説明を頂きたいと思いますので宜しくお願い致します。

東企画調整官

ありがとうございます。資料の4に基づきまして非常に簡潔にご説明させていただきます。めくっていただきまして、1で万博とはと、ここはもうおわかりだと思いますので割愛しまして、2ページ目に博覧会のあり方の変遷とありますが、これは以前澤田委員に別の会でご提示していただいた資料をそのまま使っていますが、博覧会も歴史とともにあり方が変わってきていて、昔はやはり国威発揚というところですか、科学技術のショーケースというところでしたが、今の1994年決議以降の万博というのは、人類社会の課題を解決する博覧会であるということを謳っていますので、大きな万博の流れとしてそういうところが大きなテーマとなっているというのが背景にあります。それから次のページは近過去の国際博覧会の万博のテーマと日本館のテーマを並べて書いていますので参考にしていたらと思います。

2.のドバイの概要ですが、テーマは先ほどもありましたように非常に広いのですが、「心をつなぎ、未来をつくる」(Connecting Minds, Creating the Future)というのがテーマとなっています。またサブテーマとして、Opportunity、Mobility、Sustainabilityの三つが掲げられています。会期は約3年後の2020年の10月20日から約半年間となります。それから一枚めくっていただいて、日本政府としては本年の4月に参加の閣議了解をしましてご出席の副幹事省と参加機関と共にこれから具体的に検討を進めていく必要があるというところ です。

3.の今後の大きなスケジュールですが、ざっくり言いますと今年度に基本計画を策定する、それから次年度から具体的な設計作業に入っていくと、31年度、再来年度には具体的に展示や建築物の施工に入っていくというのが非常にざっくりとした今後のスケジュールです。現在実施機関であるJETROで実際に総合プロデュース作業を行う事業者の選定プロセスに入っていて、次年度以降はその委託先を使いながら実際には展示物を考えていくということになります。

最後4.ですが、この検討会自体のスケジュールです。本日1回目11月28日ですが、先ほど座長からもありましたように基本的には3回を予定してまして、2回目、3回目と12月頃、1月頃ということで、1月には基本計画の案を提示してその場でなるべく基本計画をまとめるということを考えています。先ほど座長もおっしゃっていたようにどこを議論を絞ってやらなければならないというのがあるわけではないですが、ざっくり申し上げますとできれば本日は日本館のテーマやメッセージなど骨太なところについては是非ご意見をいただければと思います。2回目になりましたらもう少し細かい展示、建築のあり方ですか、運営、行催事のあり方といったところにも少しご議論いただければと考えています。以上です。

彦坂座長

ありがとうございました。つづきまして、資料5になります。「ドバイ国際博覧会の概要」ということで今日はサ우드様より御説明を頂きます。サ우드様は主催者である国際博覧会協会の方で、日本担当リエゾンオフィサーをされています。お手元のウィスパリングのチャンネル2を選択していただければ、同時通訳を行っておりますので、それにてお聞きください。ではサ우드様よろしくお願ひします。

2. サ우드氏より御説明 (ドバイ国際博覧会の概要)

サワード氏

それでは基本的な日本語を使って自己紹介します。私はサワードと申します。UAE から参りました。宜しくお願いします。ご存知かとおもいますが、私は日本担当リエゾンオフィサーを務めています。ニュージーランド、太平洋諸島も合わせて管轄しています。私が一歩化された窓口ということで日本側の渉外窓口をさせていただきますので宜しくお願いします。とても簡単なお説明になりますので、詳細な情報については後日もしくは資料をとということでお願いします。先ほどお話に出ましたようにドバイは2020年10月20日から次年度4月10日まで万博を開催します。これは慎重に選びました。ドバイの天候は非常に暑いので、それも考慮に入れました。この期間の天気は申し分ないです。それから建国50周年記念のナサルでもお祝いできますし、また建国50周年記念のUAEとしてもお祝いできます。万博を思い出深いものにするためにいろいろなイベントが予定されています。中東、アフリカ、南アジア地域で開催される最初の登録博となります。とても誇りに思っているのは今回初めての万博ということでひとつの国で一つのパビリオンを出していただくということです。従前の万博はまとめられていました。例えば太平洋パビリオンですとか、アフリカ館とか。それはやりたくないです。具体的に国別にパビリオンをだして頂きたいということでやってきました。一カ国1パビリオンということでやっていきたいと思えます。各国それぞれ自らの国を良くお見せできます。さらに誇りを持っているのは200以上の参加者があるということです。国単位、国際機関、NGO、そして企業も入っています。もう一つ誇りに思っていることはビジターの70%は海外からのお客様ということです。歴代の万博では来館者のほとんどは国内の人でしたが、我々は全世界と繋がりを持ちたいと思っています。真の意味での国際的な万博にしたいと思っています。海外からのお客様がたくさんいらっしゃいます。2500万人の方の来館が予定されています。

テーマとサブテーマをご紹介します。まずメインテーマですが、ドバイ博については心をつなぎ、未来をつくるということです。昨今あまりにもチャレンジが厳しすぎると、難しすぎて1カ国だけではどうにもならないということで、プラットフォームを作って、世界中から知識、知恵を結集した、そして一箇所に集まって真の意味で複雑な問題の解決策を見出していきたいと考えています。サブテーマは、まず最初がSustainability 持続可能性です。内訳はたくさんあります。細かく書いてありますが、サブテーマについてはすべて詳しくおさらいはしません。これだけに限らないからです。Sustainability に当てはまればなんでも良いのです。Opportunity についてもそうです。教育、未来の仕事、ガバナンス、いろいろ入ります。最後はMobility ですが日本はどのカテゴリーでも十分にやっていけますので、皆様方が一番好きなものを選んでいただければ良いです。ここが日本の持ち味ということでサブテーマを選んでいただければ構いません。

それではサイトマスタープランのご案内をしたいと思えます。テーマを申し上げました。テーマによってこういった形になりました。3つの花びらがありますが、Mobility ゾーン

と **Sustainability** ゾーンと **Opportunity** ゾーンに分かれています。それを繋いでいるのがワッスルと言います。ワッスルはアラビア語で繋ぐという意味です。これが中心となって3つのテーマを結びつけるという格好になっています。サブテーマ同士でも繋がりはずりあります。サブテーマは孤立しているということではなく、お互いに関係し合っているということです。

これは外観です。空中から見たものです。より詳細をお話ししたいと思います。サイトのご説明です。4つの玄関があります。入り口ゲート1〜4ということで全部で4箇所あります。このゲートを通じて5つの手段で移動できます。一つはドバイの地下鉄、これによって約 **14000** 人を毎日会場まで運ぶことができます。それから専用バスも使います。エクスプライダーと呼ばれていますが、**80** のドバイ中の停留所でバスに乗ってもらい、会場に行けます。それからタクシーと自家用車もあります。VIP のためにはヘリコプターもあります。

次に土地利用の分布についてお話しします。こういう形のパビリオンになります。花びらの中にテーマディストリクトが設けられます。そして国別の参加もここにあります。いくつかの国はサイトの外側に位置するところもあります。テーマの中の地域においては賃貸用のパビリオンもあります。多目的ホールも設置します。組織者がつくるテーマパビリオンもあります。サポートビルというのもあります。補助建屋ということで3つのロジスティックビルディング、エクスポ村、それからリテールの小売モールもつくります。パビリオンはオーガナイザーが作るものがありますが、ひとつが申し上げたようにワッスルプラザです。これがまわりにある支線のように伸びたところとの橋渡しの役をはたします。これも **Mobility** パビリオンと **Sustainability** パビリオンと **Opportunity** パビリオンということで3つのサブテーマをお話ししましたが、こういった形で繋がることになります。先ほど申し上げたようにこれがテーマ地区ということです。サブテーマでオープン地区というものもあります。各国この中に入れるものもあります。これがオープンスペースですが、3つの主要なオープンスペースがあります。ワッスルとあと二つ公園があります。あとこちらの地区です。ワッスルプラザというのは本当にユニークなスペースになります。入り口に位置するものですが劇的なイメージを来場者に与えます。電車に乗ったりしてここに到着しますが、ついた途端目にするのがこのワッスルプラザの風景ということになります。**65** メートルあるドームがあります。これが日陰を提供してくれます。夜間になるとこれがプロジェクトできるものになります。この格子のアーチになんでも投射できます。イメージとしてこんな感じになります。こちらはより詳細なオープンスペースの情報です。コンコースなどが設けられます。ディストリクトプラザもあります。パフォーマンスパーク、子供用の公園と、多目的ホールなどいろいろ入ることになります。そしてこれが **UAE** 館の現在のデザインです。

それでは次に時間軸のお話をします。日本がドバイ博に出展なさると決定されて、とても喜んでます。これはとても技術的な詳細な情報なのでさっただけさらいます。まず確認書簡が出て、それからこのインターナショナルビルにアサインメントがされます。これが国家で責任を持っている機関です。そしてテーマを選んでいただいて、ファイナライズしていただいて、デザインの提出があつて、プロットの最終化があつて、エキスポ契約をむすんで、契約をして、建設をして、イベントとなり、最後は解体するということとなります。これを時間軸的にまとめました。2018年1月の期限をもってまずサイトにアクセスできます。ソイルサンプルなどをとっていただいて結構です。建築前の段階です。そしてプロットの受け渡しは2018年4月に予定しています。そして各活動がイベントの3ヶ月前まで続きます。そしてエキスポ村は2020年8月までにはちゃんと完成することになっています。テーマステイトメントを我々に出していただきます。テーマチームに引き継いで見させて頂きます。コメントがあれば申し上げます。お相手が日本なのであまりコメントを返すということはないとおもいますが、一応これがプロセスで、大体30日~40日くらい行ったり来たりします。これが終わると最終的にコンセプトが決まるということになります。それでは質疑応答をさせて頂きたいと思います。こちらの方がずっと生産的ですので、皆様是非問題点などをお聞かせください。

彦坂座長

サウード様ありがとうございます。委員の皆様方で何かご質問はありませんか。

キャンベル委員

キャンベルですけども、パビリオンが2種類あつて、セルフビルドともうひとつはそれぞれの3つのエリアの中のテーマ単位のパビリオンがありますが、今回私たちが考えようとしていることはそのどちらになりますか。その違いというのは国別のことなのか、どういうことなのかということを確認したいのですが。

サウード氏

日本は現在セルフビルドパビリオンの方に入っていると思います。自分で建設するという事です。これは国のGDPによっても決まるということにして、国の中でもあまり発達していないところは補助ありということです。そして中間が賃貸です。大国は自前で作っていただくということです。これはセンターから考えて少し端の方に位置します。

彦坂座長

ほかにいかがでしょうか。澤田委員。

澤田委員

「心をつなぐ」と言うと、文化とか芸術とかは非常に重要な要素だと思いますが、サブテーマの中にそういったものは入っていないのですが、それについてはどうお考えでしょうか。

サウード氏

いろんな要素がこのサブテーマには入ります。なんでもありということで幅広いテーマにしました。皆様方で何をやりたいかを見つけていただき、ご自由に決めていただけるようにこういった広いサブテーマを選びました。これはよく話していることなのですが、例えばペルーのプロジェクトがありまして、リマ大学が発案してきたものですが、ビルボード、看板を作るということでリマは湿気がすごく強いので、このビルボードを使って空気中の湿気を吸い、人が飲めるような飲料水を無料で作るというものです。そういうアイデアを出してきました。世界中をこのようにつなげたいと思っています。そしてアウトリーチプラットフォームができると、そしてその役を担いたいのがドバイ博なのです。

澤田委員

もう一つ。UAE パビリオンの建築のイメージの元になったものはなんなのか、表現したいものがもし分かれば教えて頂きたいです。

サウード氏

UAE 館の構造というのは我々のチームが考えたものですが、いろんなエリアが詰まったものです。いろんなエリアについてはどのような思考工程を辿ったのか、メールで詳しくお送りできますが如何いたしましょうか。

澤田委員

イメージの元になったものがわかればありがたいです。ではもう一ついいですか？テーマディストリクトというスペースがありますが、これはどういうエリアでしょうか。

サワード氏

これがテーマディストリクトで3つから構成されています。各ディストリクトが、例えばこちらは **Mobility** ディストリクトですが、ここに入るものは全て **Mobility** のテーマに基づいたものになります。ディストリクトによってテーマが変わってくるということです。

橋爪委員

70%のインターナショナルビジターは、どのエリアから来られる方を想定されていますか。たとえばヨーロッパだとかアフリカだとか。

サワード氏

それについては内訳が出ておりますのでメールでお送りできますが、ノースアフリカ、中東中心と考えています。

彦坂座長

他はいかがでしょうか。では私からひとつ、万博のテーマの背景にあるもの、あるいは **UAE** の想いというか、なぜそのテーマにしたのかということについて簡単にご説明いただけますか。

サワード氏

ご質問はなんで **UAE** はこのテーマを選んだのかということでしょうか。 **UAE** は現在世界の中心にあると思っています。そしてアイデアでの世界のハブになりたいと思っています。いろんな問題の解決策の源になりたいと思っています。そういうことでこのテーマを選びました。

彦坂座長

わかりました。ほかに委員の方で何かご質問はありますか。

キャンベル委員

一番大きなテーマが連携性であるとか、つながることですとか共有という風に **Connecting Minds** ということ、その下に3つの機動性、流動性あるいは機会、持続可能性ということが入っていますが、それがどういう風に繋がるのか、つまりどのエリアに館を建てるかということを考える時に、この繋がるということが具体的に3テーマにどのくらい繋げることを期待しているのかということをお教えいただきたいのですが。二つの階層が違っているような気がしていて、どちらをある程度重視して構想を練ればよいのかについて伺いたいのです。

サワード氏

サブテーマというのはやはり優先度が高いです。サブテーマが元になるということです。ちょうど今問題が山積しています。これは世界共通の問題です。しかし技術開発が進んでいる国があり、問題解決に役立つ技術を持っている国があります。例えば二つの国があり、ひとつの国は **Mobility** の、交通の問題があり、もうひとつの国は漁業で問題があるとかいろいろな問題が見られますが、そういう中で知識をシェアして解決していけるように、ドバイ博をプラットフォームにさせていただいて、橋渡し役として二つの国をつなげるということです。片方の国が解決策をもっているのであればそれを交換しあいお互いに助け合うということです。われわれがその中心に立って、橋渡しの役をしたいということです。それが発想です。

江村委員

今の話で、今度それぞれのエリアで各国のパビリオンを配置するということですが、その時に他との繋がりを意識した配置をするということをお考えなければいけないのでしょうか。

サワード氏

まずわれわれとしては国をフラッター化したくないと考えています。たとえば国が **Mobility** をサブテーマとして選んだ国であっても、必ずしも **Mobility** のパビリオンにいらなくても良いわけです。 **Opportunity** パビリオンでも良いということです。日本のような国は自前で作られるのでどちらかという位置的には庭園に位置するということです。

キャンベル氏

では **Mobility** というのはどのへんのところに関心を持っていますか。 **Mobility** と **Sustainability** の関係というのはどういう風に出るわけですか。 **Mobility** のところでパビリオンを作っても **Sustainability** をどうやって強調していけるということなのか。

サワード氏

例えば **Mobility** でやって、 **Mobility** でも **Opportunity** のところで立地することもできるわけです。ストーリーをおっしゃっていただければ良いです。 **Mobility** がこうやって進展しましたよ、こういう問題がありますよということをプレゼンしていただければ良いわけです。これはテーマディストリクトですが、ぴったり必ずそのテーマの中に入らなくてははいけないということではないです。

彦坂座長

よろしいでしょうか。それではサワード様ありがとうございます。サワード様は別用があるのでこれにて退席していただきます。ありがとうございました。

3. 吉川委員より御説明（ドバイ概況）

彦坂座長

続きまして資料の6になります。ドバイの概要ということで吉川委員にプレゼンテーションして頂きます。宜しくお願いします。

吉川委員

吉川です。15分くらいでドバイの概要というお話をし、ご質問等あればお受けしたいと思っています。画面を見ていただくか、手持ちの画面でご覧下さい。私今回委員に選ばれて嬉しく思っていますが、去年の4月まで6年間ドバイに在勤しました。前職は三菱商事という総合商社に勤務して、中東・北アフリカ・中央アジア地域の代表者として6年在勤しました。2015年のミラノ万博が終わらないとなかなかドバイ万博の正式な活動ができないと言っていた非公式な活動の頃から、リーム・アル・ハーシミー担当大臣

と、たまたま私は日本商工会議所の会長を長くやっていた関係で何度か会合をしました。その頃は、どういうテーマにしていくかというようなまだ模索の段階でしたが、準備段階で関わったこともあって、今回また本件に関わらせていただくことを大変嬉しく思っています。私は前職の商社に39年勤めましたが、4回の海外在勤と2度の留学で、およそ20年海外にいましたので、社会人生活の半分を海外で暮らしたことになります。そのうち中東を2回、合わせて10年、商社人生の最初と最後で経験しまして、何かそういう経験がお役に立てるかなと思っています。

1ページをご覧ください。先ほどもお話がありましたが、ドバイというのはハブを目指している。今までは人・モノ・金のハブということでしたが、アイデアのハブになりたいという、そういう意味で **Connecting Minds** というテーマを作ったのだと思います。中東地域というのは政治的に危ない国だということばかりが日本のメディアでは喧伝されているのですが、経済的にも非常に有望な地域です。私はかつてシンガポールにも駐在しましたが、**ASEAN10** という日本にとっても有望な大市場の経済規模よりも、中東・中央アジアの規模の方がはるかに大きいです。人口的にも **ASEAN10** に匹敵する規模になっている。そしてこの万博でドバイが考えているのは、アフリカへのアウトリーチということです。アフリカへのアウトリーチを考慮すると将来この中東・中央アジア・アフリカ地域が非常に大きな市場になってくるということが言えます。

2ページをご覧ください。この地域の潜在性ということですが、経済成長、成長率、それから人口増加率、これは世界のトップクラスであると言えます。中東地域は本格的な人口ボーナス期に入っており、これはおそらく2040年頃まで続くのではないかとされています。見て頂きますと人口は非常に綺麗なピラミッド型の構成になっています。

3ページをご覧ください。ドバイはどんな所かということで、ご存知かもしれませんが、7つの首長国（エミレーツ）が集まって、ユナイテッド・アラブ・エミレーツ、即ちアラブ首長国連邦という、ある意味寄り合い状態的な国が1971年にできました。万博会期中の2021年に建国50周年を迎えるわけで、ドバイ万博は国家にとっても記念すべきイベントになるわけです。黄色で示したアブダビが面積でも資源でも圧倒的なポジションを占め、石油ガス収入で大変なお金持ちの国です。ドバイはその隣にあつて、面積も小さいですが、経済的にはアブダビに次ぐ経済規模を持っている。よく原油価格の基準になるドバイ原油という言い方をしますが、ドバイではほとんど原油は取れません。現在はどちらかと言うとサービス産業を中心にここまで大きくなってきました。ドバイはその昔はスマグリングの基地で、インドと東アフリカを繋ぐ中継地でした。アラビアンナイトの船乗りシンドバッドの舞台となったのもこの地域です。それから下に写真をつけていますが、現在のドバイのムハンマド首長は、お父さんの代から二代続く非常に野心的な首長で、商売気もありアイディアマンです。有能なリーダーが二代続いていることもドバイの成長の大きな要因だと思います。

4 ページをご覧ください。これはドバイの首長ムハンマドが4年前に出した自らのビジョンです。そこにいろんなことが書いてあります。今後 UAE をこんな国にしたい、ということが書いてあって、何でも世界一に拘るとか、政府の成長を妨げるような規制を排除していくとか、イスラム世界の国としては非常にユニークなことを言っています。このビジョンのかなりの部分の実現してきているという意味では有言実行のリーダーといえます。私は 2004 年から 2006 年にかけてシンガポールにいましたが、ドバイはシンガポールをお手本に国作りを行なってきた都市国家です。

5 ページをご覧ください。万博というのは一応国で受けるということなので、これはあくまで UAE がホスト国で、たまたまその会場がドバイにあるという整理なので、アブダビとドバイの関係を見ておきます。ご覧いただけるようにアブダビの方が圧倒的に経済力も面積も人口も多いです。ただドバイとは非常に良い補完関係で、アブダビがリソースで稼ぐ一方、ドバイはサービス産業で稼いでいます。それから家族が住む非常に落ち着いた環境がアブダビにはありますが、ドバイはどちらかと言うと独身者ですとか、観光客とかが楽しめる施設が整っているということで、この辺もアブダビ、ドバイがうまくすみ分けをして、それぞれの文化を守っているという感じがします。

6 ページは、ドバイとアブダビの経済構造比較です。細かい点は申し上げませんが、石油モノカルチャーのアブダビと、様々なサービス産業で経済を成り立たせているドバイという対比ができると思います。

7 ページです。ドバイもちょっと調子に乗りすぎて、2004 年～2007 年頃は世界の大型クレーンの 3 分の 1 がドバイに集まっていたと言われるような建設ブームだったのですが、実態的には借入れによるレバレッジで回しており、2008 年のリーマンショックで突然お金が回らなくなり、2009 年ついにドバイショックということで大負債を抱えることになりました。この時もアブダビが相当なサポートして、何とか最悪期を脱しました。今は万博という新たな目標に向けて新たな成長を始めているということです。

8 ページ、右下に 2021 ドバイプランと書いてありますが、これは 2021 年に向けた国家ビジョンです。その前年にドバイ万博が始まり、万博が終わる 2021 年がさっき申し上げた通り建国 50 周年記念ということで、それまでにこういう国になっていたいというもので、そこで言っているのはやはり科学技術の進歩を利用して持続可能な都市を創造していくのだということです。おそらくこの万博のテーマを含め、いまの最先端の科学技術を人間の進歩、持続化にどうやって活かしていくのかということをもみんなで考えようよというのが、ドバイが言いたいことなのかなと思っています。

それから少しドバイの説明をしますと、いろんなかたちで外国企業を誘致していますし、人を呼び込んでいる。そのひとつは 9 ページの「モノの流れの誘致」です。ドバイには天然の良港があって、アラビア湾の中の非常に静かな内海ですが、そこにドバイ港というの

があって、これは自然港としては世界で一番の規模です。そこは昔から交易の一大拠点で、対岸にはペルシャ、イランがありますし、先ほど申し上げた通りインド洋貿易の中継基地でもあり、ダウという木造船で行ったり来たりという貿易から始まったわけです。今では DP World、ドバイ・ポート・ワールドという公社がありまして、これは香港のハチソンとシンガポールの PSA に次ぐ、世界3位のメガターミナルオペレーターです。同社は世界約40カ国で80ヶ所のターミナルとか、フリー・トレード・ゾーンを運営する世界的な企業に成長しています。ここにグラフがあるのは世界の港の、ターミナルとしての順位ですが、アジア以外では中東ドバイが上位にずっと安定した地位を占めています。

10 ページは「人の流れの誘致」で、空港です。現在も巨大なドバイ国際空港があります。いらっしゃった方、乗り継がれた方もいらっしゃると思いますが、これは旅客数では7千万人強で現在世界3位ですが、国際便だけをとると2014年にヒースローを抜いて以来世界1位です。ただしここも既に手狭になっていますので、第二空港としてアル・マクトゥーム、これは王様のファミリーネームをとった空港ですが、これを現在拡張しています。11 ページにアル・マクトゥーム空港の資料がありますが、滑走路が5本あります。完成すると世界最大規模の空港になり、2025年には1億4000万人、現在のドバイ空港の倍の旅客を扱える大空港になる予定です。万博会場もこれにすごく近いところに位置する予定です。

12 ページは「カネの流れの誘致」、即ち投資促進ということです。UAEの中で37のフリーゾーンがあります。その内27がドバイにあって、エアポート・フリーゾーンとか、港のジェベル・アリ・フリーゾーンとか、ヘルスケア・シティとかメディア・シティとか、国中がフリーゾーンの様相を呈しています。中東の場合はイスラム法の規制があって外国企業が現地法人を設立する場合、現地資本がマジョリティでなければならないだとかいろいろ縛りがありますが、それから除外された、外国企業100%で会社を設立できるのがそのフリーゾーンです。27箇所もありますのが、それぞれに特徴のあるフリーゾーンを設けており、業種別ですとか、場合によってはフリーゾーンの間で競争することも奨励していますので、非常に活発な誘致活動を行なっています。

13 ページをご覧ください。これは万博の資料で、先ほどサワードさんからご説明があったので詳細は割愛します。中東で初めての万博ですが、UAEの国自体が人口数百万人ですから、一千万人に満たない国が万博のホストをするというのは初めてだと聞いています。また万博は基本的に来場者の大半は自国民ですが、先ほど70%と仰っていましたが、大半の来場者がインバウンドの人たちという点でも初めての万博なのではないかと思います。先ほど橋爪先生からご質問がありましたが、おそらく現在観光などでドバイに来るビジターの国の構成が万博来場者の国別構成になるかと思います。そういう意味では中東、北アフリカはもちろんですが、ヨーロッパは非常に多いです。それから中国などアジアから来る人も増えており、文字通り世界に開かれた万博になるとおもっています。

14 ページは大型の不動産開発で、今も 830 メートルのブルジュ・カリファという世界一高い建物がありますが、今計画されているのは 2000 メートルのビルを建てようというものですとか、ちょっと途方もないような計画をいろいろと立てています。おそらくこれをまた実現していくのだらうと思います。

15 ページをご覧ください。世界を驚かせるプロジェクトということで、AI とか IoT の世の中で、先進的な科学技術を躊躇なく取り入れて、実際の実用に活かしていくということをずっとやってきています。左の写真は空飛ぶタクシーです。空飛ぶパトカーというのも先日発表したと記憶します。右側はロボット警官、こういうものをドバイプラン 2021 の実現に向けて進めているということですので、万博は先進的な日本の科学技術を紹介する場にもなるのではないかと思います。

最後に日系企業の進出状況ですが、16 ページをご覧ください。ドバイは現在、中東・中央アジア・アフリカ地域で最大の日本企業と在留邦人の集積都市になっています。アジアと比べると一桁違いますが、それでも 400 社くらいの日本企業が盛んに活動していきまして、そのほとんどの企業がドバイの仕事だけをやっているわけではなく、ドバイに拠点を置きながら中東・北アフリカ、更に他のアフリカの諸国や中央アジアに向けて仕事をしている、ハブ拠点のようなかたちで事務所を置いているというのが特徴です。

17 ページをご覧ください。これは日本企業のドバイでの取組み事例です。左の下にあるドバイメトロは、先ほど説明がありましたが、この支線が万博会場に繋がることになります。これは手前味噌ですが、私が勤務した三菱商事が、三菱重工さん、大林組さんとこれを建設しましたが、2009 年の運行開始以来無事故で、非常に安全な乗り物として定着しているものです。他にも日本企業各社さんが、色々なかたちでインフラとかサービス産業で地元貢献されています。

最後に 18 ページに日本企業としてのビジネスの狙い目ということを書きました。産業の多様化だとか、観光客の誘致への貢献、更に、環境配慮、持続性の高い社会への貢献という面で、日本が持っている様々なサービス産業、食文化、エンターテインメント、インフラビジネス、それから環境・省エネで日本は非常に先進的な国ですので豊かな経験を他の地域にも活かせる、こういう点もドバイ万博で日本が PR していくポイントかなと思っています。以上、駆け足でしたがご説明致しました。

彦坂座長

ありがとうございます。ご質問ある方いらっしゃいますでしょうか。橋爪委員。

橋爪委員

ありがとうございます。最後のページのビジネス参入の狙い目のうち、例えば日本食ではこういう日本食が現状ではうけている、あるいは、これからうけるであろう、あるいはアニメなどに関しても現状こういうアニメが人気である、あるいは、これからこういうアニメが人気ができるだろうなど、そういう事例はありますか。

吉川委員

キャプテン翼も有名ですね。それからドバイの方が原作を作って、日本の女流アニメ作家に描いてもらったアラビア語の漫画が、ドバイ紀伊国屋で発売されて話題になりました。中東は鷹狩りが有名ですが、タカと少年の友情をモチーフにした、ドバイ発の MANGA です。

橋爪委員

ぜひその辺のディテールをまたうかがうことができると思っています。逆にタブーであるとか、こういうのはダメだとかも御教示ください。

吉川委員

私のプレゼンでは申し上げませんでしたけど、タブーといいますか、イスラム教で禁じられていることは尊重する必要があります。飲酒や豚肉ですとか、女性は人前で肌を見せないとか、そういう基本的なことがあります。ただ外国人に対しては非常に寛容で、お酒や豚肉もホテルのレストランでは供されますし、ライセンスが必要ですが街中に酒屋もあります。外国人ではTシャツ・短パンで歩いている女性もいますが、そういうことに関してもあまりうるさくないです。地元の女性は皆、顔だけ出して黒いアバヤという全身を覆う服を着ていますが、そういう文化をちゃんとリスペクトするという態度さえあれば、基本的に外国人がどうだということに対しての縛りはあまりない国です。

彦坂座長

ありがとうございました。ほかに、はいどうぞ。

江村委員

資料の中にはなかったのですが、最近で言うとカタールとか周辺国との関係、それはどうご覧になりますか。

吉川委員

今回外交を断絶した湾岸諸国とカタールは、いわば親戚みたいな関係なので、内輪の喧嘩という感じがします。カタールは天然ガスで収入が増えて、ちょっと飛びはねて、アルジャジーラをつくったり、FIFA ワールドカップの単独開催にこだわったり、これまで中東の国がやらないようなことに挑んで、カタールとしての存在感を出そうとして、やり過ぎた感があります。それに対し、いい加減にしろということをみんなで言ったということだと思います。おそらく時間が解決すると思います。もともと親戚ですから。そのカタールがこれからどういう風にビヘイブするかだと思います。GCC という地域連合みたいなものを作って、そのメンバーには今も入っていますので、このまま決別して行き来もしないということにはならないと思います。いま物理的にはドバイからドーハに行くにも、通常 30 分飛ばせば行けるのが、現在はオマーン経由で 6 時間かかるそうです。そういう不便さをまず一回味わってもらって、これから気をつけろということだと思いますので、今は教育的指導期間ではないかと思います。

彦坂座長

よろしいですか。ちょっと私から 2、3 点だけ。新空港は万博には間に合うのですか。

吉川委員

もう開港していますので。新空港も既に使われています。貨物便は新空港がメインですし、エミレーツ航空というドバイのナショナルフラッグキャリアがドバイ空港を優先的に使っていて、他のエアラインが新空港に回されるという現象があります。将来的にどっちがどっちになるかはわかりませんが、おそらくもう 2020 年頃には新空港の拡張も終わってかなり整備された空港になっていて、もしかするとエミレーツが新空港を使うということになるかもしれないです。

彦坂座長

あとちょっとしょうもない質問ですが、ドローンタクシーありましたよね。あれは日本円でいくらですか。

吉川委員

私もニュースを見ただけで詳細は承知していませんので、調べてみます。

彦坂座長

それとインドの人もね、働いている方が多いし、観光に来られる方も多いと伺ったのですが、インドの多くはヒन्दゥーで、そうすると豚と牛が逆転していますよね。そういう食生活とかは問題ないのですか。

吉川委員

インドから来ている方は南部出身のイスラム教徒が多いです。インドはマイノリティーとはいえ2億数千万人のイスラム人口がありますからね。勿論クリスチャンの人もヒन्दゥーの人もいますが、かなりの部分はムスリムだと思います。

彦坂座長

ありがとうございました。

澤田委員最近、この地域は欧米化が進んで糖尿病などの健康の問題が大きくなっていると伺っていますが、医療とか健康についての日本のビジネス機会はどのようなのでしょうか。また、よく日本というと先端技術とかと言われますが、日本に対する先端技術の期待とかイメージはどのようなか。それから単純に日本人のことが好きなのか、嫌いなのかということをお教えいただければと思います。

吉川委員

二つ目のご質問から先にお答えすると、中東・中央アジア地域には親日国が多いですね。アラブよりもイランやトルコの方が親日度は高いと思いますが、アラブ諸国も日本については非常に好意的に見ています。

技術的にも、やはり日本には優れた技術があって、非常に信頼性が高いということが言われています。特に車ですね、家電製品はかなり今衰退しましたが、車もおそらく半分以上は日本車ですし、タクシーは全てトヨタのカムリです。もともとドバイのお金持ちは日本車の代理店をやったり、時計や日本製品の代理店をやったりして、財を成した人たちが非常に多いです。経済人と日本との関係は非常に強く、基盤は日本との企業との仕事で築いたという人が多いです。

それから最初のご質問の健康ですが、基本的に肥満体質の人が多くですし、糖尿病など病気の方も多いです。日本の医療も優れているのですが、イスラム対応という面では遅れていると思います。メディカルツーリズムについては、日本ももう少し積極的にやったらよかったです。今は完全にタイやマレーシアに取られています。日本は遠いということもありますが、東南アジアはイスラムの人が対応してくれることが重要な要素かも知れませんが、勿論特別な医療技術や意思を頼って日本まで来る方もいます。それこそ外国からもっと積極的に看護師を入れて対応力を高めたら良いのではないかと思います。

彦坂座長

はいどうもありがとうございました。吉川委員ありがとうございました。

4. 自由討議

彦坂座長

続きまして資料7の「検討に際しての視点・留意点」について、事務局よりご説明を御願いたします。

東企画調整官

資料7に基づいてぜひご議論いただきたいのですが、一応ご意見をというところで簡単にご紹介させていただきます。資料7、2ページの右下のところ。ご議論いただきたい点はこれに限るという趣旨ではないのですが、ぜひ本日触れていただきたい一つは、ストレートに論点①として書いていますが、日本館のテーマはどう設定すべきか。ドバイのテーマ「心をつなぎ、未来をつくる」という中で、日本館としてのテーマ、コンセプトというのをどう考えるか。二つ目は、ドバイのサブテーマの3つのうち、先ほどもありましたけれども、日本館としてどのサブテーマを選ぶのかというのを求められておまして、必ずしも1つじゃなくてもいいのですけれども、日本と関連の深いサブテーマがあるのかというのを考えていただく必要があると思っております。

1枚めくっていただいて、そのテーマですけれども、検討にあたっての視点・留意点ということで幾つか書かせていただいております。1つ目は、ドバイ博のテーマの下今世界に発信すべきメッセージは何なのか。技術で最先端をいっているという話もありましたけれども、そういう技術を見せたいのか、あるいは伝統文化、あるいは日本人の価値とか精神性みたいなものなのか、というところが一つあるかなど。事務局としては、2020年より先を見据えてやはり万博は技術のショーケースという側面もありますので、最先端技術を見せていくというのは当然あるのだろうと思う一方で、それにとどまらず、やはり日本人の価値観、感性、ここでは思いやり、和の精神、繊細さと書いていますが、こういったものをしっかりとメッセージに据えることで独自性を出していく、差別化を図っていくということ、そして国際社会に理解を深めてもらうきっかけとするべきではないかというふうに考えております。

それから2点目ですが、やはり2025年の国際博覧会、大阪・関西誘致というものをやっていく中で、大きなメッセージ、コンセプトというのがやはり一貫したものであることが大事かなと思っています。冒頭、藤木からもSDGsの達成に貢献していくといったご紹介をさせていただきましたけれども、こういったところはあんまりブレないようなテーマ設定やメッセージにしていきたいなということを考えております。

それから3点目は、訴求対象者は誰なのかということで、縷々ご議論がありましたけれども、ドバイは中東のハブである。特に、中東・アフリカの中心地ということであること、来場者が非常に多様であることというのを考えると、開催国UAEとドバイとの関係というのはしっかり意識しつつも、より幅広い来場者も念頭に置いたメッセージというのを考える必要があるのではないかということを書かせていただいております。

4ページ以降は、参考資料として今申し上げたような視点あるいは留意点というものに関連する資料を付けさせていただきます。4ページ目は、我々日本人の感性を表すキーワードというのを参考に付けさせていただきます。5ページ目以降、5、6、7と大阪の誘致をやっていく大阪・関西の国際博覧会誘致というものの概要を付けさせていただきます。赤字にしていますが、大きなコンセプトとしては“People's Living Lab”と書いています。参加者全員で共創していくのだ、未来社会をみんなで作るのだ、トップダウンじゃなくてボトムアップでみんなで作るというのが一つ大きなテーマになっていまして、こういったところもぜひご認識いただいた上でご議論いただければと思います。

その次のページは2025年博の狙いということで、先ほど申し上げたSDGsの達成ということと、特に日本は官民を挙げて「Society5.0」と言っていますが、AIですとかIoTですとか、あるいはバイオ分野ですとか、先端技術をフル活用して世界の課題解決に貢献していくのだということをお大阪誘致の戦線では謳ってございまして、こういったことも背景としてご認識をいただければと思います。その次のページは、経団連様のほうで作成されている資料を使わせていただいておりますが、SDGsの達成のために日本はSociety5.0という技術で課題解決していくというアプローチを全体のSDGsのゴールと日本が取り組む技術分野を書き並べている資料でございます。

それから8ページ目は、来訪者の話ですけれども、参考までにUAEの人口構成と、UAE訪問者の内訳というのを付けさせていただきます。左下がUAEの人口構成であります。実際、ネイティブというのは1割ぐらいで、あとはインド人をはじめ、非常に海外の人が多く、働きに来ている方が多いというのが一つの特徴であります。右下が来訪者の

内訳のデータになっていまして、周辺国のサウジ、オマーンといった隣国と、インド、それからイギリス、ドイツといったヨーロッパ、アメリカ、あと、アジアも含めて本当に多様なところから人が来ているというのが見てとれると思います。9ページ目でございますが、過去博の同様に基本計画を策定したときの日本館のテーマ、メッセージというのを参考までに付けさせていただいております。9ページ目は、2015年ミラノ博のときのものでして、今回のアウトプットを考えてみるに当たり少しイメージとしてご参考までに付けさせていただきました。その次はアスタナ博でございます。

それから11ページ目の3点目、サブテーマ検討に際しての視点・留意点と書かせていただいておりますが、先ほど申し上げたように、ドバイ博のサブテーマ3つ、①Opportunity、②Mobility、③Sustainabilityの中から日本としてどこに最も関連があるのかというのを選択していくことが求められております。基本的には日本が何を発信したいのかということと、親和性の高いものを選ぶということだと思っておりますが、サワードさんの説明の際にもご質問がありましたけれども、基本的に我々の理解するところでは、万博のテーマ設定は割と出展者に解釈の自由度は非常にあるものだと思っております。必ずしもガチガチにこの主催者側が設ける、あるいは想像するものの中で何か決めないといけないということではなくて、自分たちがこの場を使って何を発信していきたいのかということがやっぱり非常に大きなところだと思っております。もちろん求められているものは求められているものとして念頭に置きつつも、必ずしもこうじゃないといけないとか、厳密にリクワイアメントがあってその中で動かなきゃいけないということではないと理解しておりますので、ここに先ほどサワードさんのプレゼンテーションにもあったような、ドバイ側の想定しているようなフレーズとしての重点分野をここに付けさせていただいておりますけれど、別にこの中に収まらないといけないということでも全くないですし、あくまでも参考ということで付けさせていただいております。すみません、駆け足でございましたが、私どもからは以上です。

彦坂座長

はい、どうもありがとうございます。今、ご説明していただいたことをベースに、重要テーマに入りたいと思いますが、今日は第1回であるので、各委員それぞれ思いをいろいろ語っていただきたいと思っております。委員ではありませんけれども、実際、今日は副幹事省のほうから精鋭の課長が4人いらっしゃっていますので、後ほど少しその思いも伺いたいというふうに思います。最初、江村委員のほうから。

江村委員

私がここに参加している理由は、経団連の Society5.0 実現部会長を務めているためです。先ほども「Society5.0 って技術でやるのだよね」というお話があったのですが、あまり技術を前面にした議論は実はしてなくて、技術が世の中を変えられることをうまく表現することが大事だと思うのですね。AI とか IoT というのは、表現があれですけど、どこの国も言っている話です。Society5.0 では、国でも議論されていますけれど、100歳時代みたいなものを見たときに、仕事のあり方とか教育のあり方とかそういうものが変わっていきます。だからサブテーマの中で見ると Sustainability かなと思っていたのです

けれど、Opportunity を、今よりはもうちょっと先を見た視点で訴求していくというのが2025年に向けてつながるといふ視点でも結構重要なんじゃないかなというふうに思っています。

もう1点だけ言わせていただくと、Society5.0は何かという議論をしているときに、私たちが最近一番意識して言っているのは、4.0って情報社会なのですね。情報社会というのはサイバーの世界の議論で、サイバーの世界ではデザインするとか、何でもできるという感じなのです。でも、それを実際の社会に戻していくときに一番制約があって、そこをどう解いていくかというのが我々の一番の大きな課題だよという話をしているわけです。その中で、日本もいろいろ課題を持っているものを世界に先駆けて解いていくというような視点が出ればいいかなというのが、私たちが最近議論している内容から見たときの私の思いです。

彦坂座長

どうもありがとうございました。この社会に戻すというのは具体的にはどういうイメージですか。

江村委員

例えば、都市なら都市で、その都市のデザインをサイバー世界でするといろんな構造が描けるわけですが、実際に戻そうとすると、一つはテクノロジーがそこに効かないという場合もあるし、人間の受容性でそれを受け入れてくれないという部分もある。なので、次の社会のデザインって実はすごく難しくなっているのです。ちょっと雑談的なお話をすると、societyの最初の狩猟社会って2万年続いて、農耕社会が2,000年、それから工業社会が200年、情報社会が今50-60年経っていて、だからSociety5.0って10年なのかと言うとそうじゃない。もう一回人間が戻ってくると、そのデザインで相当長いスパンの議論をしなきゃいけない。ある意味で、変曲点に来たのではないかと。テクノロジーがガッと進んでいったことに対して、もう一度人のあり方を考え直す時代に入って来たのだというのが我々の議論なのです。

今、随分世の中でAIとかが技術側にガンと議論が寄っているのを、「いやいや、そうではありません」と、やっぱり人というものを重要に見ながらAIみたいなものを使っていくというのに入ってきたというような意識を持っていて、ですから、それはやっぱりメッセージとして技術を前面に出すというよりは、ある意味での世界の見方をもう一回変えましょうという感じかなという意味です。そのときにリアルな社会ってそんな簡単じゃありませんよねという、戻すときの難しさとはその問題を今申し上げました。

彦坂座長

ありがとうございました。それでは引き続き、キャンベル委員お願いします。

キャンベル委員

多分、私がここに呼んでいただいているのは、4月から国文学研究資料館という大学共同利用機関の館長を務めているのですけれども、そこでは、古典籍から筆写、印刷された書籍をアーカイブして、今全世界にあるものを画像で撮影をし、タグ付けをして整理をし、それをもう一回本とします。言語文化というふうに私は呼んでいるのですけれども、それを研究資料に活用するという場所にいるわけですね。今回はテーマというものが最初に示されたときに、この **Connecting Minds** というところまで今分かっていて、今日その3テーマということを知ったと思うのですけれども、具体的にどういうふうに日本の様々な表象であるとか、資源というものをそこに結びつけて、それが単に発信するのではなくて、先ほど江村委員のお話にもありましたけれど、日本が今抱えている課題を先取りするような感じで、逆反射すると言いましょか、どういう意味ができるのかということやまずその議論に関わる、それに寄与するという立場かなというふうに思っているわけです。今日、サワードさんのお話を最初に伺っていて、幾つか皆さん質問を投げて、まだちょっと分からないところがありますけれども、それぞれのサブテーマの中にこの **Mobility**、**Opportunity**、**Sustainability** というのを一応選びはするけれども、対角線上にいろんな交差があるよというふうにおっしゃったのですね。ですが、それが具体的にどういうこと、つまり相乗的に例えば、**Mobility** と **Sustainability** というのはとても深い関係にあると思うし、優位性がそれぞれにあると思うのですね。ですから、そこは1つを選ばないといけないのかどうかということ。もう一つ、**Mobility** というのは、今資料の中では物や人の移動手段として規定されているのですけれども、社会的な **Mobility** はどうなのか。そうするとそれが **Opportunity** とそのまま重なる。重ねないといけないのではないかなとも思ったわけですね。ですから、まずこのパラダイムの中でどういうことが考えられるかということや考えながら、具体的なさまざまなイメージであったり、テーマであったり、そこからコンテンツを具体的に精査していくという流れになるかなというふうに思いました。

彦坂座長

ありがとうございます。私見では、何を選んでも **OK** みたいな感じで、会場計画からいろいろ見てもドバイ側がつくるテーマパビリオンというのがあるのですね。これに関してはかなりがっちりやると思うのですよ。あとは結構緩い感じを受けるのですね。ですので、クロスオーバーする部分とかは多々あると思うのです。

キャンベル委員

そうすると、むしろ **Connecting Minds** という一番大きな屋根のようなものに入って顕在化させるというか、**Connectivity** というものを一つこのテーマとして考えていくこと、それをお聞きしたかったのですけれども、ちょっと消極的だったのですね。それぞれこの3つのテーマを重視したというふうにおっしゃっていただけましたけれど。

彦坂座長

敷地を選ぶときにどこのゾーンかという、何か全然別の話も一方であるみたいですが、大きな **Connecting Minds** の傘の中では、意外とその辺は結構自由にいけるのではないかと

う気はしています。Connecting Minds が外れちゃうとそれ以前の話になってしまいますけれども。だから Sustainability とか Mobility プランは、そこに入るための一つの窓みたいな話で、入ったら他にもつながっているというので全然構わないのではないかなという気はいたします。

キャンベル委員

私は Connectivity そのものが面白いなというふうに思いました。この中に定義された3つということを基層にして、Connectivity そのものを少し進化させるようなことも日本のいろんなあり様から考えると深いかなというふうに思いました。

彦坂座長

ありがとうございます。1つだけキャンベル委員に伺いたい。言語文化のお話をされましたよね。日本語の言語文化とアラビア語、これの構造的違いというものは。

キャンベル委員

今 Connectivity の話をちょっとだけしましたけれど、日本語って膠着語ですよ。接頭語とか接尾語を重ねていくことによって世界を構築していく。中国もやはり膠着語。アラビア語にもそういう部分もあるのですけれども、膠着語ではないのです。ですから、例えば壺飾りがありますね。口切りの茶事をするときに、壺に新茶を入れて、橙色の紐も非常に美しく結んで一つのトータリティをつくる。日本語の言語もかなりそういう類似性があるって、ドバイの中にそういったものがいろんな形で繊細に表現できればいいなど。まだ全然早いですが。

彦坂座長

右から左に書くというのは。

キャンベル委員

そうですね。でも、古代ギリシャでもそうだし、そういう言語は幾つもあります。書記言語は幾つかそういう共通性はありますけれども、そういうつながっていくとか、融合性があるとか、結節力といいましょうか、そういったことが一つの文化的な特徴であり、割と表しやすい。多分、今は世界の中でいろんな思いというか表現の仕方があると思いました。

彦坂座長

ありがとうございます。それでは澤田委員お願いします。

澤田委員

私は万博をつくる仕事なので、どうつくるのかということが気になります。その視点から5つぐらいのポイントでお話をします。まず BIE 総会の 94 年決議があり、そこで人類共通の課題を解決するというふうに万博が定義されたのですが、これは、最近の万博の展示内容が類似してしまう傾向になる問題が生じています。つまり環境であれば、どこの国でもそれほど環境に対する考え方や技術が変わらない。食だと食文化でちょっと違うのですけれども、エネルギーになるとやはりほとんど変わらない。どこに行っても同じようなものを見ることになる。これは万博が多様な解決を集める場である価値を低下させている側面があるのではないかと思っています。すでに BIE 事務局としては気付いていると思います。この 94 年決議は、90 年代はじめに万博が相次いで失敗したことに対する一つの改革として行われて、当初は良かったのです。この決議の下で最初に開催された万博が愛知万博で、大成功したわけです。この決議が行われた 94 年から 25 年経って世の中も変わり、どうも 94 年決議が万博の多様性を低下させている側面が出てきていると思われれます。

それを見ると、今回の Connecting Minds というのは、包括的で非常にやりやすい。また、ドバイのように急速な成長をしていて、その未来がそのような広がりを見せるのか分からない地域で開催するという事は、万博の基本にある興奮とか、ブレイクスルーする力ということを出せるような万博になる期待を感じました。今日、会場計画を見て、非常に素晴らしい会場計画で期待感が盛り上がりました。と言えやはり気になるのは 94 年決議の問題で、展示が一緒になるということもあるのですが、もう一つは課題からスタートするので、「地球は危ないからこうしましょう」「食糧が危ないからこうしましょう」となり、人はそう聞くと抑制的な印象を持ちやすいと思います。テーマ館に行くと暗い話から始まるので、何か暗い気持ちになってしまいます。そういう万博でいいのかという気がしています。やはり博覧会は、未来に対する理想主義・楽観主義で行い、それを見た人々の心に未来に対するエネルギーを発電するような仕組みである方が良いのではと思っています。これに対処するにはあまりテーマに捉われすぎずにやっていくということが大事なんじゃないかなと思います。

ただ、BIE の意向や参加する万博のテーマつなぐということは大事ですが、まずは、日本が万博の場をどのように使っていこうかということを考えて、それに BIE や参加する万博のテーマとの紐付ければいいのか、そういった考え方が大事だと思います。またそれは、万博は各国パビリオンが並び、世界の国が全部集まって競合状態で並ぶということなので、他のパビリオンに負けちゃいけないわけです。負けないようにするということが非常に重要な話で、どうすれば勝てるのだろうかというところから発想して、当然テーマは片隅に置きながら、勝てるポイントを考えていくということが大事なのだろうなというふうに思います。

2つ目は、やはり日本人はちょっと良い人過ぎる。国際的な評価を気にしすぎるくらいがあります。だから「日本人はとても良い人です」という方向に行くのですが、今後の日本はもっと世界の中で期待される国にならなければならぬ。そのためには、もっと日本人は自分のことに自信を持って、「こういう考え方に基づいて、世界をリードしていくんだ」ということを強く言ったほうが良いと思うのです。いつもその辺が日本のパビリオンに欠けているように思っており「日本人は良い人です」という話になっちゃうのですが、もうちょっと強く主張したらどうか。

日本の価値はやはり信頼感だと思うのですね。日本は世界のリーダーシップをとれる位置にいますので、世界の中でもちょっと違った文化を持っていて、信頼できる。だから、日本の言うことに耳を傾けようとか、日本の提案は良いかもしれないと。国際博覧会の場合は、日本のブランドをつくる場所だというふうに考えて、あんまり良い人過ぎずに日本の国益というよりも世界の利益を考える上で、日本はどうするのかをもう少し自信を持ってアピールすべきだと思います。先ほどの勝つとは違う視点として、日本は今後どういう国家として世界をリードするのかをアピールして、ブランドをつくっていくという視点も必要なのだろうと思います。

3つ目はやはり勝てる素材をどうするのかというのが非常に重要で、先ほど申し上げたように、全ての技術はほぼ同一線上というか、非常に小さいところの差になっている。これを一般の人に展示として見せるのは相当難しく、僕はそこがポイントなのではないかなと思っていて、例えば、iPS というのが世界でどう評価されているか分かりませんが、iPS というのは日本の大発明であって、これをアピールするポイントにすれば、Connecting Minds にどう結びつけるかという問題はあるけれども、こういったものを素材に物事を考えていく。例えばこのような考え方がありますが、とにかく勝てるポイントとテーマをうまく結びつけていくということが大事です。

4つ目は、次回の議論かもしれませんが、やっぱり勝てるという意味で言うとたくさん人が並んでくれるわけですね。ミラノ万博で日本はすごい大人気でした。イタリアの人に聞いてみると、中身に対しては特にはないのですね。ただ、「日本を知っているぞ」「日本館に行った」ということが自慢なネタになるのだそうです。だから、「日本ってすごいものがあるから、とにかく見に行く」というより「俺は見たぞ」というのがどうもイタリア人の非常に日本館を見たいというモチベーションになったわけですが、本来はそこにやはり驚くべき体験やメッセージの伝わる高い作品性がなきゃいけないと思うのですね。これもやはりテーマをちゃんと結びつけないといけない。

だから勝てる素材、それから勝てる演出、テーマという3つをグルグル、グルグル回しながらあわせて考えていかないと、おそらく勝てないだろうと思います。

今回のドバイ国際博覧会日本館ですが、かつての大阪万博のテーマでしたが「調和」ということが大事なのかなという気がします。単なる調和ということじゃなくて、「美しい調和」なんじゃないかと思うのです。きれいな調和。日本人ってやっぱりきれいであること、それから、第三者からきれいに見られることをものすごく気にするような気がすると思います。そういったことを少し掘り下げながら、加えて日本が絶対に勝てる優位な素材をうまく使いアピールしていくということが大事かなと。例えば、日本の水引は結びつけるという意味で非常に分かりやすいデザインなので、そういったものをきっかけに物語を始めるとか、そういうようなことがあるのではないかなと思います。

彦坂座長

どうもありがとうございます。美しい調和というテーマが出ましたね。ありがとうございます。では続きまして、橋爪委員お願いいたします。

橋爪委員

アスタナの博覧会を見た印象で言うと、やはりテーマが狭いので、どのパビリオンも、各国とも同じような展示・展開にならざるを得なかったと思います。今回は逆にかなり幅が広い中で、各国もそれぞれ独自の展開をするであろうと思います。

6点ほど申し上げたい。1点目は、「2020年におけるルック・イースト」という視点。東の方角を意識することが重要。ドバイはシンガポールをモデルとして発展してきたという。ただシンガポールとかマレーシアが、そもそも日本モデルなんですね。ということは、シンガポール経由だけれど、日本の戦後高度経済成長をモデルに、今の中東の国々の発展はあるとって良い。いろんなご意見があると思いますが、そういうことを前提とした上で、我々は東洋の国であるから成し遂げてきた、ないしは、こういうことができるのだということを示すべきであろうと。

なぜこの視点が重要かといいますと、ドバイがさまざまな分野でハブだと言うときに、我々の方位は明らかに東である。東の端にある我々が何を、どういう価値観を示すのかということが、打ち出し方としては非常に重要だろうと思います。要は西洋でもない、アメリカでもない、東洋、東方に位置する我々が何を打ち出すのかということをはブであるドバイにおいて示したいと思います。

2点目は、技術から語るのではなくて、どのようなコンテンツを我々はアピールするのかという視点から議論すべきだろうということを示す。中東の国々は、世界中の最先端のテクノロジーを自らのものとして、実際の社会で実用化します。先ほどのドローンとかもそうですし、スーパーカーのパトカーとか、ありとあらゆる新しいものがすぐさま実践社会に投入されている。その状況下で博覧会をするというときに、我々が最先端だと準備したものが、もう実はドバイの国では実用化されているような懸念があります。要は、我々が最先端だと博覧会場で示す技術が、中東の国々では2020年段階で、もはや最先端じゃない可能性がある。それを避けるためには、あくまでもテクノロジーなどは表現の手段、あるいはそれをサポートするまさにテクノロジーとして意識すべき。他にないコンテンツを、最新のテクノロジーで表現するという姿勢が重要。何を示すのか、どんな価値観を示すのかということを示すべきだろうと思います。

3点目は、2025年国際博との関係。現在の構想で使われているキーワードで言えば、「People's Living Lab」という視点が重要。世界の人々が参加してさまざまな社会実験を重ねるのだと訴えている大阪関西博覧会の、プレとなる展開を2020年のドバイで行う。これは2025年国際博の構想では、2025年想定の世界人口80億人の人が大阪とつながると想定している。要は、通信等の技術の進展によって世界さまざまところと会場がつながることを準備している。それから東京オリパラにおいても、従来とは違う新しい通信のあり方と示されていくのだろうと私は思っておりますが、日本館を媒介として、世界各地とドバイがつながっていることを見せる。ドバイの日本館なのだけれど、たとえば日本の東京のどこかのシアターなどのライブとか、歌舞伎などの古典芸能とかが、最新テクノロジーでサポートされながらリアルタイムで中継されているという展示もあるのではなかろうかと思えます。

4点目としては、季節感というものを表現すべきではないかと思えます。ドバイ博は12月から4月ですが、真冬といえどもちょうどいい気候で過ごしやすい季節。世界の人々がドバイの12月のクリスマスでのバーゲンセールとか、新年の超高層ビルからの花火とかを楽しみにしているのですが、現地で欠けているのが季節感。春とか秋とかのない中東の国々において、我々が持っている固有のコンテンツとしては、春と秋の四季折々の変化

がある国だということを挙げられるであろう。例えば、無理かも知りませんが、本物の桜を持って行って、コントロールしながら咲かせるとか、本物の紅葉を示すなどができないか。あと期間中に正月があったり、日本でいえばひな祭りがあったり、年中行事が同時進行している中で、そういうものをうまく見せていくということもあると思います。

5点目としては、展開しているサブテーマよりも、この Connecting Minds という大きなテーマのほうが我々日本人の感性からすると、さまざまに展開がしやすいのではないかと。さっき澤田さんがおっしゃった結び目を示すということもありますが、結ぶという言葉は非常に日本人にとっては大事な言葉だと思います。神話の神々の名前でも、「むすび」とつく神が多い。「産む」という言葉から展開し、「むすび」になっている。いっぽうで、禊などの人の身体に水とつながるような概念から結びという概念も展開されている。それだけではなく、我々日本人は、さまざまなものと結びつきあいながら文化をつくってきたのだということは対外的に説明しやすいし、それは先ほど申し上げたルック・イースト、すなわち東洋ならではの価値観、感性というものとつながりやすい。なので、展示全体に展開する必要はないと思いますが、導入の辺りなどでこの Connecting Minds という主題の解釈を、我々は大事にするべきだというふうに思います。

最後に6点目ですが、ちょっと話が本題から外れるのですが、ドバイには3度か4度行きましたが、一番の問題は砂嵐だと思われまます。世界に貢献するというお話であれば、気候変動に対する日本の姿勢を示すのも良いかとも思います。要は日本のテクノロジーで砂嵐をとめるような、そんな技術展開は難しいかも知りませんが、視点としてあるかと。上海のときは別の意味でスモッグが問題でしたが、今回は砂漠の中での博覧会なので砂塵対策も課題となる。展示だけではなく、建物の設計にも響いてくると思います。中東では初めての博覧会なので、気候バイアスというのは結構あるかなと思います。なので、特に気候変動に対する日本の技術などを私は生み出すのもいいのかなと思います。以上です。

彦坂座長

どうもありがとうございました。アイデア満載みたいな感じですね。それでは時間の関係もありますので、引き続き吉川委員お願いします。

吉川委員

私は、諸先生方のような専門的な立場での具体的なことは言えないのですが、ドバイで開催するという一点申し上げます。ドバイは先ほどもご説明しましたが、住民のほとんど外国人なのです。仕事の場をドバイがつくって、そこに世界中から人が集まり仕事をして価値を生み出し生活の糧を得ているという都市です。ドバイはそのように場を提供して成長し続けている(首長)国だという事実をおさえておく必要があると思います。そういう意味では、自分たちで技術を作るわけではないが、作れる人材に来てもらって、ドバイを拠点として技術を開発し、良いものは即座に取り入れて使っていくし、そういうことに対してあまり躊躇しないというようなお国柄なのですね。ですから、先ほども先生がおっしゃっていましたが、いろんな過程を飛び越して一番最先端のところへ行ってしまうような人たちなのですね。だからそういうことも理解して、日本はどう見せるかということに難しさがあるのかも知れません。

あと、Connectivity ですけども、イスラムの人たちは基本的に大家族です。今でも大家族で住んでいて、お年寄りを非常に大事にします。一族の長は最長老のおじいさんなのです。ですから、お年寄りにいかに良い人生を送ってもらうかということは、若い子供たちにとっても非常に重要なのです。もっとプラクティカルな人種かと思いましたが、実は日本人が無くしてしまったような家族の絆みたいなものが、非常に強く持っている人たちなのです。それから、もともと部族社会と言われていますが、それだけに一緒に生活している共同共同体の中での関係が極めて強い。それが地域の特性だと思いますので、そういうところに訴えるというのも重要な点かと思えます。

キャンベル先生もおっしゃっていましたが書道ですけども、向こうにもカリグラフィーという文化があります。非常に有名な書道家も居ますし、文字を大切にしている文化があります。湾岸諸国の歴史は比較的新しいですが、地域で見ると勿論古代文明が栄えたところですので、古いものに対する憧れと新しいものを受け入れる進取の気性が混在しているところがあると思います。どこに訴え方の焦点を定めるかという点についても色々ご検討いただければと思っております。ちょっと抽象的ですが。

それから、ご参考までですが、たまたま先週私ども三菱総合研究所の理事長の小宮山宏がドバイの Sheikh Mohammed から Knowledge Award という賞を受賞しました。毎年世界でナレッジの普及に顕著な貢献をした人物や団体に贈られる賞ですが、彼が評価されたのは「プラチナ社会」という豊かさと環境保護と人間の幸福を同時に達成する社会の実現を提唱していますが、その活動が評価されたということです。この授賞式で記念セミナーが開催され、第一セッションのモデレーターはリーム・アル・ハーシミー万博担当大臣だったそうです。この賞を日本人がこのタイミングで受賞したことは、ドバイ万博とのつながりでも重要なことだと思います。この賞の財団は小宮山先生の著作をアラビア語訳したいと言っているようで、この点もドバイと日本の関係には大いにプラスになると思っております。以上です。

彦坂座長

どうもありがとうございます。実は、今日ご欠席の内田委員と齋藤委員からメッセージを頂戴しています。ちょっと事務局のほうから本当に簡単にご案内だけできますか。

東企画調整官

資料の 8-1 と 8-2 というのが入っております、ご覧いただけますでしょうか。順番に 8-1 は内田委員からいただいているコメントです。ご覧いただければ一番早いのですが、簡単に読み上げさせていただきます。

メッセージに関して言えば、単語 1 個ではなくて、きちんと動詞まで含めたメッセージにせよということをおっしゃってました。それがしかも、未来形なのか、命令形なのか何なのか、ニュアンスまでちゃんと「何を何々する」みたいなテーマにしないと、あまり抽象的にポンと単語だけ出ても、みんなの解釈がずれるのではないかということをおっしゃっていたのと、日本の特徴や強みみたいなものは、いろんな感性があるのだろうけれどバランスが良いことじゃないかと。それは、その和の精神にも通じるものがあると。それからこれは先ほどご議論でもありましたけれども、日本人は割と自分の良さを出すことに躊躇

躊しがちなものだけでも、こういう場では遠慮せずに「自分たちはこうだ」というメッセージを強く出したほうが良いということをおっしゃっていました。

それから、訴求対象者で広く構えろということは書いてあるのだけれども、やっぱりローカルというのをしっかり重視すべきだということをおっしゃっていました。それは、ちょっとここに書いてございませぬが、繰り返しいらっしゃる方もいるということと、現地で日常生活も含めてメッセージを浸透させるということを見ると、少し長い視点で働きかける仕掛けも用意しつつ、ローカルな人に何を伝えていくかということを考えればいいのではないかと。例えばとしておっしゃっていたのは、ここに書いてございますが、日本から専門家を呼んでワークショップを開催するとか、Face to Face の実際に日本人と現地の方が会って何かをやるようなプログラムを用意するとか、あるいはローカルの全ての小学校に折り紙をプロモーションツールとして配布するとか、会場外へのアウトリーチみたいなものを考えると面白いのではないかとというご指摘もございました。

それから、展示に関して言えば、現地で受け入れられている特徴を生かして他の国では真似できないコンテンツを用意すべしと。具体的には、例えば展示を全てマンガにしてみるとか、ロボットを100体置くとか。思い切った展示しなければ来場者の心には残らないのではないかと。展示は張り切ったほうがいいということ、何か日本の特徴を活かしたものを使うべしというようなコメントをいただいております。

それから、8-2のほうでございませぬが、齋藤委員からのコメントでございませぬ。5つありますが、1点目の万博で表現すべきことというのは、やっぱりこの全体のテーマからして、日本が心をつなぎといるコネクトということだと思ひますけれども、いろいろな業界とか垣根を越えて、オールジャパンで何かを共創していくということが大事なんじゃないかというのが1点目のご指摘。2点目、日本の本物が関わることとなつていますが、やはりその各分野のプロの人といひますか、本物の人に関わつてしっかりと日本のクオリティの高いものを発信する必要があるということをいただいております。3点目ですが、特にクリエイティブな世界で次世代の若いクリエイターですとか、そういった方が参画する機会であるべきであると。それは日本のクリエイティブの底上げにもつながっていくことすし、具体的には必要であれば実際に展示とかをやつていただく方に、採用にあつて年齢制限とか経歴などを加算対象にするのも良いと思ひますというコメントをいただいております。4点目は、オープンイノベーション「共創」と書いています。実際にこれは1点目とも重なるところかと思ひますけれども、オープンイノベーションはなかなか実際には起きていないので、こういうドバイ万博みたいところをきっかけにしっかりと日本ならではの共創というのを見せられる場にするべきであるということ。最後5番目にキュレーションとありますが、こうしたことを実際にやつていくためにはしっかりとどういうものを展示していくのか、プロデュースする、キュレーションするということが非常に大事であるということでありまして、やや実務的な観点から書いていただいておりますが、実際に入札で決定するプロデューサーは実行推進を行うことを主として、キュレーションを行う人といひるのは別途投票とか推薦とか、誰が全体の展示をつくるにあつてのマネージをするのかといひところのあり方を少し考えたほうがいいのではないかとというご示唆をいただいております。簡単ですが以上でございませぬ。

彦坂座長

ありがとうございます。それでは、一言ずつで結構ですので、まずは総務省の秋本課長。

秋本課長

テーマに Connecting という言葉がございますので、私どもの日々接している範囲で申し上げますと、情報通信が挙げられるかなと思っております。これまで私ども、お一人お一人の聞きたい、見たい、知りたい、言いたい、伝えたいというお気持ちをつなぐ役割を果たしてまいりました。今後はモノとモノ、機械と機械、データとデータをコネクティングして行って、将来・未来をつくっていくということで、情報通信をもっともっと使い勝手の良いものにしていくという観点からお手伝いができるかなと思っております。そういう意味では、Software as a Service とか、Internet as a Service という言葉もございましたように、Radio wave as a Service といいますか、サービスとしての電波というものは今後未来をつくる鍵になってくるかなと思っております。

幸か不幸か、日本は世界でも有数の電波稠密国でございます。加えて、匠の技術者が多数おられますので、この電波のサービスという点では世界に冠たるものを示していけるのかなと。例えば、気象レーダーは世界に冠たるサービスを提供できる素地がございますし、また、電気自動車の蓄電を電波で回線なしで行うことも世界で初めて実現しております。それから、自動走行システムにつきましても、世界に先駆けてまさにこの 2020 年に実現していこうというところを目指しているところでございます。そういう点では、サブテーマの中では Mobility に一番関わる部分で、通院しなくても済む、通勤しなくても済むという点で、人の移動はむしろ省いていくということも可能になってくる。そのことによって、自動化の可能性やまた機会の創出にもつなげていくという点での広がりがあるかと思っておりますので、そういう観点から協力をしていきたいと思っております。

折しも、東京オリパラがちょうど終わるような時期に開催されるドバイ博でございますので、東京オリパラの後も次の目標を見失わず、我が国産業界にはドバイ博があり、そして 2025 年の大阪があるということで、情報通信をもっと世界に、日本の電波サービスを世界にお見せしていく良い機会になるかなと、そういう観点からお手伝いできないかなということで、産業界の方々と相談をしていきたいと思っております。以上です。

彦坂座長

ありがとうございました。では続いて、文部科学省の安藤様。

(里見課長代理) 安藤様

本日は課長の里見が出席すべきところを急遽、代理出席になりましたことお許しください。今回、ドバイ万博のテーマが Connecting Minds ということで、文科省の所管する教育、文化、科学技術に関して、今日もさまざまな委員の先生方からお話の出た中にも関わりの深い内容、分野が含まれていたと感じたところでございます。まさに今後こういった議論の場の中でテーマが固まっていく中で、当省の所管分野との関係で当省としても貢献できる場所があればと考えておりますので、引き続きよろしくお願いたします。

彦坂座長

ありがとうございました。それでは、農林水産省の原課長。

原課長

農林水産省の原でございます。私のほう、先ほどの江村委員のほうからもお話がありましたけれども、研究開発の立場なので Society5.0 の実現に向けてというのが立場ではあるのですけれども、皆さん先ほどいろんな話し合いのとおり、技術が前面に出るというよりは、イメージを出していくということが大切であるというのを感じさせていただいて、すごく参考になりました。そういった意味での技術をどういうふうに活用していくかということ以上に、特にちょっと立場を離れて広い目線で見ますと、例えば食文化だとか、農林水産、食品産業物品、そういったものはやはり特にドバイでの万博では非常に大事、また印象も与えられるものだろうと思っています。

日本は UAE のほうにも年間 50~70 億円ぐらいでしょうか、食品の輸出が中心になっているのですけれども、博覧会の中では7割の外国の方々が来られるということもありますので、ある意味いろんな日本の中でも調和とか季節感だとか、日本はいろんな四季もあるので、食というものも見極めて一緒にあると非常に有効なイメージ感を与えるのかもしれない。いろいろな面でご協力できればと思いますので、今後もどうぞよろしく願います。

彦坂座長

ありがとうございました。副幹事省、最後になりましたけれど、国土交通省の村田課長。

村田課長

国土交通省の村田でございます。今回のテーマ、“Connecting minds, Creating future”ということで、国土交通省は非常に幅広い仕事をさせていただいておりますので、サブテーマの **Mobility** ということについてももちろんでありますし、それから **Creating future** ということに関してもさまざまな分野での技術開発も取り組んでおりますので、この検討会でご議論いただくテーマに沿った形で、私どもとしてもご協力できるところがあるのではないかなというふうには思っております。今までの日本館と同様に、観光の分野では、今「**Visit Japan**」ということで特に取り組んでおりますし、そういったところも含めて、ポイントとしていただくことになるのではないかというふうに思っております。引き続きよろしく願います。

彦坂座長

ありがとうございます。今日参加されている JETRO の赤星副理事長からもぜひ一言お願いいたします。

赤星副理事長

赤星でございます。我々ジェットロは日本館を運営する立場でございますが、あえて個人的なコメントをさせていただきます。私もアスタナ万博に行ってきました。実は1970年の大阪万博以来、初めての万博訪問だったのですけれども、万博とは大変楽しいものであると思いました。ただアスタナ万博の日本館がどうだったかという、ジェットロも参加機関という立場ではありましたが、改善できる点もあったと認識しております。ちなみに2008年サラゴサ万博では展示部門で金賞、上海万博では展示部門で銀賞、麗水万博ではテーマ部門で銅賞、ミラノ万博では展示部門で金賞を頂いておりました、アスタナ万博は、実は日本館がメダルを取れなかった久々の万博です。

皆様がおっしゃっていたように、「未来のエネルギー」というテーマでの展示だと各国の展示内容がほとんど同じものになってしまいます。ただそれでも何か工夫していた館というのはありまして、一方で日本館については、事後に日本館テーマが「水素」だったと聞きましたが、メッセージが弱かったかなと感じました。メダルを取れば良いというものではないとは思いますが、ジェットロとしてはメダルをもう一回目指そうというつもりで考えています。自己満足になってはいけないとは思いますが、「日本」とはこうなのだという、心に残るものをつくりあげていきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。以上です。

彦坂座長

ありがとうございました。それでは最後に、小瀬審議官から一言よろしく願いします。

小瀬審議官

今日は多岐にわたる幅広い質問とご意見をいただきましてありがとうございました。かなり幅広くて、そうやって見ると、**Connecting Minds** という言葉自体のほうに、皆さん調和だったり、共創だったり、そこら辺は馴染むのだけれども、サブテーマのほうがどうかというのがある、サブテーマを決めなきゃいけないのは、そもそもどの場所にパビリオンを建てるか結構早めに決めなきゃいけないものですから、そういう意味では、ある程度一番親和性の高いどれかを決めなきゃいけないというのはございます。

もう一つ、やはり勝つためのポイントということでコンテンツ、それはアスタナで思いましたけれども、正確にいうと勝つためにはコンテンツをさらにどのように示すか。結局今の博覧会はどうしても映像が中心にならざるを得ない。限られた予算の中でやっていくということで、どうやって相手の心に刺さるようなツールであるかまで本当は議論をしないといけないのですが、しかし3回しか機会がないものですから、もちろん今後見据えながらではあるのですが、ある程度皆様のご意見をいただき、修正しながらまとめていかなきゃいけないと思います。次回、また事務方でいろいろ考えて案を提出させていただきますけれども、確かに勝つためにということではあるのですが、できるだけ分かりやすいテーマのほうに今後修正させていただければなというふうに思っておりますので、よろしく願いいたします。

彦坂座長

ありがとうございました。本来は丁々発止の議論をやって、つかみ合いぐらいのものを予想していたのですが、私の時間配分が悪くてもう時間を既にオーバーしていることなので、事務局から2点だけご連絡がありますので、よろしくお願いします。

東企画調整官

本日は本当にどうもありがとうございました。次回の日程につきましては決まり次第また事務局からご連絡させていただきます。それから、先ほど申し上げたように、議事要旨と議事録を作成して公開したいと思ひまして、議事録のほうにつきましては追ってご確認をお願いすることになると思ひますので、お手数ですが、ご発言等について後ほどご確認いただければ幸いです。あと1点だけ、橋爪先生から現地でどういうアニメならアニメ、どういうコンテンツが受け入れられているのかというようなご指摘もありまして、先ほど、何が勝てるコンテンツかという話もありましたので、少し現地のそういった事情といひますか、調査などができないかというのをそういうところもやっていきたいと思ひます。

彦坂座長

事務局のほうで現地調査を前向きにということと理解しました。本日は本当に長時間にわたりありがとうございました。これで第1回ドバイ国際博覧会日本館基本計画検討会を終了いたします。大変お疲れ様でした。ありがとうございました。

お問合せ先

商務・サービスグループ 博覧会推進室

電話：03-3501-0289

FAX：03-3501-6203